

予算額

3,017,815 円

地域課題解決に向けた取組

取組の名称	グングンプロジェクト				
趣旨・目的	<p>子ども達の体力の二極化が進んでいる。鹿屋市においても状況は変わらない。子どもたちの体力向上を考えると、単一の種目に限定して教室等を開催するのではなく、総合的に運動能力を高めるための教室の充実が望まれる。この課題を解決する方法として、「多様な動きをつくる」「自分の身体を思い通りに動かす土台をつくる」事をねらいとしたコーディネーショントレーニング教室を開催することとした。</p> <p>併せて、子ども達に本当に必要なスポーツ環境とはどのような環境なのか、子ども達にこの時期にこそ身につけさせるべき運動課題は何なのか、指導者や保護者が一体となってどのように取り組んでいくべきなのか、一緒に考える機会は少ない。今回研修会という形を取りながら、保護者が子どものスポーツ環境の在り方について一緒に考える機会としたい。</p>				
内容	<ul style="list-style-type: none"> 鹿屋市中心部、吾平地区、串良地区の体育施設5会場でコーディネーショントレーニング体験教室を実施。 指導者・保護者のための研修会として、「コーディネーショントレーニングを学ぶ会」を開催。 				
1 対象者	体験会：小学生 学ぶ会：鹿屋市に勤務する小学校教諭、幼稚園教諭、保育士、保護者	参加人数／回	体験会：100名 学ぶ会：30名	実施回数	1
効果を高めるための工夫や取組など	<ul style="list-style-type: none"> 地域の子どもたちの体力向上の環境を整えていく上で、中心部の施設に集めるのではなく、子どもたちが学校帰りに、もしくは自宅から歩いてこれる場所での教室開催が望ましいと考える。今回学校施設というわけにはいかなかったが、それぞれの地域で主となる、また、小学校から割合近い施設を選び、教室を開催する。 小学校での教室の案内(チラシの配布)はもちろんだが、地域からの発信ということで、町内会からの配布も依頼した。学校施設を使って、また何かチームに所属してという、これまで取り組んで来た子どもたちのスポーツ環境だけではなく、子どもたちが帰ってきたその場所(町内会)で様々な指導者や運動に触れる環境整備がこれからますます重要になってくると考えている。ちょっとした子どもたちの教室も、町内会を常に巻き込むように意識してきた。 				
成果	<ul style="list-style-type: none"> 小学校や幼稚園等の職員に教室開催について理解してもらえるようになった。 保護者と指導者が子どもの体力停会や現在のスポーツ環境について一緒に考えることができた。 				
課題	<ul style="list-style-type: none"> 定期教室とした時に施設の定期利用が難しい。スポーツクラブは優先順位は再会である。 				

小学校体育活動支援

派遣先学校総数	8 校
---------	-----

コーディネーター総数	12 名
------------	------

◆効果を高めるための工夫や取組など

- ・ コーディネーターが学生の場合は学生単独で授業に入るということは一切行わず、プロジェクトリーダーもしくは教員免許を持った職員が必ず一緒に入ることとした。その際指導案作成や担任教諭との打ち合わせ、及び授業の展開は職員が中心となり、模範の部分で学生が担当するというように役割を分担した。
- ・ 授業に入る学生とは事前に入念な打ち合わせを行い、模範で動きを強調するところや、見せるタイミング等について工夫することとした。

◆成果と課題

〔成果〕

- ・ 授業の展開方法について、担任教諭と意見を交わすことができたこと。
- ・ 指導計画と指導案作成をすることによって、授業展開の考え方を学べたこと。
- ・ 運動を苦手とする児童の保護者から、子どもが家庭で体育の話をしてくれたとの喜びの声があったこと。
- ・ コーディネーターとの意見交換や授業での模範を通して、単元ごと各々の技のポイントに関する理解を深められたこと。
- ・ コーディネーターが体育の授業に来るということを、児童らが楽しみにしていたこと。
- ・ コーディネーター自身が、現場の指導に対して意欲的になり、動きのポイントをより深めたこと。
- ・ コーディネーターが模範演技をすることが、授業の雰囲気高め、児童の体育への取組を爆発的に盛り上げたこと。
- ・ 本クラブと体育大学や地域の指導者との繋がりを深めることができたこと。

〔課題〕

- ・ 担任教諭の意見を第一として、コーディネーターの授業における位置づけを打合せで明確にすること。
- ・ 鹿屋市全小学校に当事業を理解してもらう場とそのための資料を作成すること。
- ・ 担当する授業で、コーディネーターが児童の顔と名前を覚え、全ての児童に声をかけること。その精神的ゆとりを持つこと。
- ・ 授業のめあてを、児童にいかにか気付かせるか、常に考え続けること。
- ・ 体育全単元にわたり専門指導ができるコーディネーターを配置すること。
- ・ プロジェクトリーダーがコーディネーターとこまめに連絡を取り合い、円滑な授業の準備をすること。
- ・ 動きの技術的なポイントが具体的に分かるような独自の教材を作成すること。
- ・ 担任教諭が見ただけで、授業のイメージを十分に思い描けて、指導のねらいがすぐ理解できる指導案を作成すること。

本事業全体の成果と課題

〔成果〕

- 事業全体という観点からみた成果は、コーディネーター派遣ということが、小学校担任の体育に対する不安を助ける役目があり、実際にそういうニーズがあったことである。
- コーディネーターの立場からみた成果は、小学校と直接的な関わりを通して、教育現場でいかにして児童に体を動かす楽しさを教えるかという生きがいの場ができたことである。

〔課題〕

- 一番大事な課題は、この事業が2, 3年で終わるのではなく、10年、20年計画で続けることである。なぜなら、体育の教育現場で、担任の先生方や校長先生、教頭先生から「来年はこの事業はあるのですか？」とよく質問を受けるからである。この事業が続くことによって、担任の先生が小学校体育の授業をより意欲的に取り組むようになり、児童らが体を動かし外で遊ぶようになれば、これ以上の喜びはないと思う。
- この事業をもっと小学校、地域、保護者の方々に認知して頂くことである。地域・保護者がこの事業を十分に認知すれば、地域ぐるみで児童らが遊べる環境づくりに取り組むきっかけができるだろう。この事業を通して、児童らが外で遊べる環境づくりを、小学校をはじめ、大人たちが取り組めるようにしたい。このような意義と課題が、スポーツコミュニティ形成事業にあるのでないだろうか。